

---

# **親の愛情はいつまでも、どこまでも**

空音色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

親の愛情はいつまでも、ビームでも

### 【著者名】

Z6360D

### 【作者名】 空音色

### 【あらすじ】

クラスメートの女子が母親を亡くした。彼女は不良の女子達に虐められていた。ところが翌日……。

俺が中学生だった頃の話…。  
母親を亡くしたクラスメートの女子の話である…。

「清水は忌引きで今日は学校に来ないぞ」

朝のホームルーム。

担任の先生が俺達生徒にそう告げた。  
それでざわざわが起きたが、

「静かに。それと……今日の全校集会だがな…」

とすんなり別の話に変えたので、すぐに収まった。

清水ひかり……実は、このクラスの数人の女子集団に虜められている女子だった。

担任が教室から去った後、

「チツ…今日は一緒に昼食食いたかったのに…」

「明日になれば来るわよ

「明日なら一緒に食べれるわよー」

「……そもそも」

キヤハハハと笑いだす虜め組。

呆れた顔で彼女らを見ていた何人かの男子と女子。俺もその一人であつた。

清水に散々酷い事ばかりしているのを、クラスメート全員は既に知つていたが、皆、それを止めようとする気はないみたい。

諦めているのか、仕返しが怖いのか、どうすればいいのかわからぬいのか。いろいろと理由はある。

ちなみに俺は…わからない組であつた。

「彰

「…

「…彰？」

「…

「あーきーらー？」

「つ？ な、なんだ？」

翌朝。ボーッとしていた俺に何度も声をかけてきた和哉に慌てて向き直る俺。

「何考えてたんだ？ ……もしかしてあの不良女共の事か？」

後半は耳打ちで俺に問いかけてきた和哉。

教室の隅にその不良虐め組がいたからであらう行動であつた。

「それもあるけど……清水の事だな」

「ああ…なんとなくわかるわそれ」

一体誰を亡くしたのかわからないが、もしそれが家族、または一番近い親族だったなら、清水はさらに暗くなってしまうだろう。  
それこそ不良共のいい的であった。

（あまり話はしないけど……小学生の頃はめちゃくちゃ明るい奴だつたのになあ……）

小学生、同じクラスだった頃を思い出す。

今は別クラスとなつた女子達と話し、楽しそうに笑う清水。  
今じゃ見る影もなく、目が虚ろになるばかりである。

ガラガラ

「！　来たわよ！　！」

教室のドアが開く音。

開けた人物は昨日休んだ清水だった。

彼女が来るなり不良虐め組は駆け寄つた。

「おはようひかり、昨日はどうして休んだの？」

「え……昨日は、お葬式があつたから……」

「お葬式？　誰が死んだの？　ねえ教えてよお」

明らかに失礼極まりない問い掛け。昨日先生が言つただろうが。さつきも思つたが、誰が亡くなつたのかは知らない。

「ああまたか……」とクラスメートの一部は彼女らを見た。

「……お母さん……」

「ありつ？　お母さん死んじやつたの？」

「あらう可哀想（）」

「あいつと涙が止まらなかつたのね、えへんママ～！…つて

あははははははー！と高らかに笑いだす虜め組。見ていた皆の顔が怒りに変わる者もいた。

「……やばいな

「ああ……」

和哉の短い感想に、俺も同意する意味で相づちをうつた。

でも和哉の言つ言葉の意味と、俺が捉えた意味が違う事を知ったのは、また翌朝の事であった。

「えー……皆に、残念なお知らせがあるんだ。驚かないで聞いてほしい……って無理かもしねないな……」

ホームルーム。いつもより担任の表情が生き生きとしていない。そして虜め組全員の机が空いていた。この事と関係があるのでどうか…？

「実は……」

担任の口から聞かされた話は、俺達全員を驚かせる事であった。

なんでも、昨夜、不良組が夜遊びからの帰り、町の踏みきりを通っ

たら、一人の女子……不良虐め組のリーダーが線路のへこんだ部分に足がはまつてしまい、とれなくなつたようだ。

それで他の仲間達が慌ててリーダーを助けようとしたらしいのだが、そこを電車が来てしまい、間に合わずに全員がひかれたらし……。

話が終わり、彼女らの葬式はこいつだと話した後、担任は教室を出た。

「やつちまつたか……」

「え？」

和哉の言葉の意味がわからず、俺は疑問を一言で聞いた。

「おれ、昨日やばくなつて言つただろ。あれ、ビうこつ意味かお前わかつてたのか？」

「……ぶつちやけ言つと、ハツキリとは」

「…そつか。いや、そりや そつだらな……」

和哉は呆れた……あるいは仕方ないと言つたげなため息をもらした。

「前に話さなかつたか？」

「何を」

「おれの靈感の話……」

「……！？ まさかお前」

「ああ、昨日の朝見たんだよ。清水の背後にな

母親らしき靈を見たんだ。

和哉の言葉にやつと理解した。

やばくなつて……まあか、

「じゃあ、昨日の事故は」

「おそれぐ、清水の母親の仕業だらうな。昨日は散々清水を虐めまくつたから、それを見てしまつた母親の靈の呪いなんだらうな」「まさか……ありえるのか?」

「ありえるだろ。ほら、清水の背中……」

「つ?」

と和哉は、窓際の一一番後ろの席に座つてゐる清水を見た。

「母親が清水を可愛がるような顔で見ている」

もぢりん俺の田から清水の母親なんか見えはしないが、和哉がそう言つと…見えているような気になつた。

「親つて…」

「…なんだ?」

ふと思つた事、

「死んでもやつぱり死にきれないのかな? 死んでも自分の子供をやろうとするし……だからこんな事故起きたのか?」

口から出つてきた。それに和哉は

「多分、そつなんだらうな。でなきやこの世に歸まらないし。あいつらに呪いなんかかけよつとしないだろ?」

清水の背中にこるといつて母親の靈を見ながら、そう答えてくれた。

「こしても……清水、いい顔になつたな」

今、清水は窓から空を眺めていた。

久しぶりのゆっくりした時間を、感じているのだろうか……。

その日から、清水は小学生の頃のように明るくなつた。  
クラスメートとの交流も深まり、気付けば俺は清水とすんなり会話を  
をする仲にまでなつた。

「……彰君、ひどいよ。いくらなんでも……」「  
「う、ごめん。悪気があつて言つたワケじゃ……」  
「え……そうなの。良かつたあ……」「

俺の「冗談にはまだ真に受ける清水。

清水が他の女子に呼ばれ、俺の元から離れていったと同時に、

「あんまり清水を悲しい目に合わせない方がいいぞ。……殺される

からな」

「えつ……！？」

和哉が背後からひとつと耳打ちをしてきた。その内容で俺は田を  
丸くした。

そして行つていぐ清水の背を見た。

「一……」

一瞬…母親らしき姿を見たのは、俺の気のせこだらつか…。

中学を卒業して、高校に入学し、むらむら進路を決めて、社会人になつてからも、まだ母親は娘を守ろうとしているのだろうか……。今となると、調べる術はないが、一つわかつた事があった。

親つてこのは、生きていても死んでいても自分の子供に愛情を注ぎぬくしたいものなんだつて事。

「パパー！ 遊ぼうー！」

「おっ、何がしたいんだ？」

「キヤツチボールー！」

親になつた俺は、死んでもこのつを守りつとする想いでいっぱいなんだ。

誰かがこいつにひどい事をしたら、そいつを俺は殺したいと思いたくなるんだ。だから。

F  
i  
n  
.

(後書き)

今回はじめて初投稿となりました。

一応テーマは『親の愛情』について沿ってみましたが…。  
あまり上手く伝わらなかつたらごめんなさい…。

お読み下さりありがとうございましたm(\_ \_ )m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6360d/>

親の愛情はいつまでも、どこまでも

2010年10月15日22時13分発行